ミュージッキングに内在する実践共同体的性格に関する理論的検討

壽　谷　静　香

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第68号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2023, Vol. 68. 77～80

報告・資料・研究ノート

ミュージッキングに内在する実践共同体的性格に関する理論的検討

Theoretical Analysis of the Community of Practice Aspects of “Musicking”

壽　谷　静　香[1)]

要　旨

本稿では、ミュージッキングに内在する実践共同体的性格について、理論的な側面から検討を加える。ミュージッキングの基盤となる音楽的コミュニケーションを概観しつつ、特にミュージッキングにおける相互的で即興的な人と人の関わり合いの特徴を踏まえ、ミュージッキングと実践共同体の接点を探索し、理論と実践の連関を図る。

キーワード：ミュージッキング、実践共同体、理論と実践の連関、音楽的コミュニケーション

「ミュージッキング」は、クリストファー・スモール（Christopher Small）が提唱した、音楽を現在進行形で表し、人間の行為として捉え直す、古くて新しい概念である。ミュージッキングでは、音楽をモノや作品として認識するのではなく、いかなる立場からでも、誰もが音楽に参加することができるとされる（Small, 1998)。具体的に、ミュージッキングでは、舞台等で繰り広げられる音楽の演奏以外にも、例えば聴取行動や練習場面、即興を含む作曲やダンス等で音楽に参与する行為も、全て音楽する行為に含まれる（Ibid.)。

本稿では、最初にミュージッキングの土台とも言える音楽的コミュニケーションを概観し、後半で、ミュージッキングに内在する実践共同体的性格について理論的側面から検討を加える。なお、実践共同体とは、後で詳しく述べるが、それぞれの参加者が、公式・非公式な相互交流の中で、随時異なる役割を担い、各人が独自の専門分野や様式を発展させる人々の集まりのことである（ウェンガー、マクダーモット、スナイダー, 2002)。

[1]美作大学短期大学部

ミュージッキングの土台となる音楽的コミュニケーションについて

エレン・ディサナーヤカ（2018）は、音楽の複雑性や多様性を包括的にとらえ、音楽を、人間性を構成する要素、すなわち人間を人間たらしめている精神生物学的能力であると示している。全ての人間は、複雑で多面的な音や音楽で関わりあうことができる、コミュニカティヴ・ミュジカリティを有しており、音楽が人間の全てのコミュニケーションの基礎をなすとしている（ディサナーヤカ, 2018)。例えば生後間もない赤ちゃんと母親の相互的な関わりにおいて、コミュニカティヴ・ミュジカリティは、抑揚を有する言葉がけやマザリーズと言った、いわゆる音声の関わり合いを超越する、感性の関わり合いであることを指摘している（Ibid.)。母子相互作用においては、音声や顔や身体の動きが一体化して、リズミカルな発声や体動、旋律的な輪郭、大小や上下などの空間的・時間的多様性を含有する。音や声に限定せず、組織化された音体系が、ヒトの進化の原点を構成するのである。このように、

音楽には行動を自発的・情動的に発達・変容させる力があり、美的、もしくは原美的と捉えることができるのである。

その後人類の歴史の中で、人はコミュニカティヴ・ミュジカリティから進化し獲得された原音楽的能力や音楽の感受性は、宗教儀式や芸術活動として用いられるようになった。身体は音楽に揺さぶられ、音楽は意味の創出や共有、同調を促し、一体化された時間芸術として人々の間に育まれる（Ibid.）。Dissanayake（2000）は、例えば宗教の儀式を「芸術の集合体」と呼称し、音楽がなければ、そもそも儀式は成り立たないと主張した。上述の母子相互作用で発声が表情や動きと切り離せないように、儀式における芸術の集合体、すなわち歌や楽器演奏、踊りや打ち鳴らしは、相互作用的に表出するのである。

昨今では、コミュニカティヴ・ミュジカリティに続く概念として、コラボレティヴ・ミュージッキングが、音楽療法の領域で脚光を浴びつつある。すなわち、音楽をモノや作品と捉えず、活動、行為と捉え、人々の参加を可能とする媒体と捉え直すのである。人間が元来的にコミュニケーティヴ・ミュジカリティを有していることを前提としてではあるが、各個人が多様な音楽、すなわちミュージックスと出会うことでアフォーダンス、つまり適合化がなされ、ミュージシャンシップが培われることが示されている（パヴリチェヴィック・アンスデル，2018）。音楽と関わることで、自ずと人々は聴取を含め、どのような方法であれ音楽活動に参加し、音楽的な実践共同体が養われることになる（Ibid.）。パヴリチェヴィック・アンスデル（2018）は、音楽性をすべての人の育ちに含有される潜在能力と捉え、多様な音楽との関わり合いにより文化的学習がなされ、ミュージシャンシップが培われ、直接的社会参加ミュージッキングの活動に移行するとして体系化している。したがって、ミュージッキングはミュージシャンシップを拓き、ミュージシャンシップを刺激する、相互的な関わり合いが実現する過程なのである。むろんこれらは直線的な発信ではなく、双方向に、相互的に関わりあう概念的な体系である。

ミュージッキングと実践共同体の接点

宗教の儀式や阿波踊りのような祭り等、音楽が誰しもを巻き込み、地域社会で共同体を構成するミュージッキングの在り方は、実践共同体の理論と近似している。ウェンガー、マクダーモット、スナイダー（2019）は、実践共同体を、ある題材に関する関心や問題、熱意を共有する人々の非公式な結びつきで、その分野の知識や技能を、相互交流を通じて深めていく集団と定義している。すなわち、実践共同体の枠組では、あらかじめ計画された実践と区別し、一つ一つのプロセスの最中や、プロセス同士の間で発生・変化する状況に、体験知を共有しつつ意思決定を下し、自らの判断で適切に行動することとしている。このように実践的に構築される共同体は、均一的な特質を持たず、それぞれの参加者が、公式・非公式な相互交流の中で随時異なる役割を担い、各人が独自の専門分野や様式を発展させるのである（ウェンガー、マクダーモット、スナイダー，2019）。上述の、ミュージッキングの実践と実践共同体の理論は、非常に親和性が高いことが見て取れる。

教育実践の研究では、佐藤（2021）が、学びの共同体の理念を打ち出し、教卓や教壇があり、学び手が一方向で並んでいるような従来型・伝統的な教室では、目指すべき教育改革は達成不可能で、「学びの『場』、『関係』と『環境づくり』は、授業改革の出発点である。」（p.88）と主張している。また音楽教育分野でオープンペダゴジーの重要性を主張しているAllsup（2022）は、学びの場における非公式な関わり合いやつながりも、公式な学びにつながる重要な要素であることを述べている。これらの方向性は、ミュージッキングにおいて求められる、人々の関わり合いや、音楽的対話、つながりの基盤となる。

ミュージッキングにおける共同体形成過程と実践共同体の理論を検討すると、両者が近似した性格を有していることが浮き彫りになる。Small（1998）は、歌唱や器楽合奏を通して演奏や即興を行う人間の営みの一つとして広義に音楽を捉え直している。したがって、ミュージッキングにおいては、関わり方が多様で、

事前の練習や計画に沿った、いわゆる音楽の授業やオペラやオーケストラのリハーサルのような進行は伴わない。即興的で複雑多様な関わり合いの中でミュージッキングの活動を分かち合う過程で、実践共同体が形成されるとみて良いだろう。

ミュージッキングの実践に唯一の答えは無いと推測されるが、これまでの筆者等による実践的研究で、ミュージッキングに内在する人と人、人と音楽の関わり合いの特徴が以下に整理されている（壽谷他, 2022)。

①あらゆるジャンルの音楽や多様な音を題材として組み込むことを可能とする。したがって、多くの幼児、児童、生徒、大人も含む参加者への動機づけが可能となる。音楽の関わり合いがつながり、ひいてはより広範な共同体の構築につながる可能性が増幅する。

②ユニバーサルデザインや共生の理念と親和性が高く、音楽の経験値や知識・技能のレベル、さまざまなハンディを乗り越え、誰もの参加を促すことができる。参加者はそれぞれの興味関心、技能に応じて、参加形態や教材や支援の提供を受けることができる。

③即興的で音楽的な関わり合いを通し、その場で早期に共同体の構築が可能となる。るつぼ的な関わり合いの中で、音楽が共有されるため、長時間の事前練習を伴わない。参加形態の選択やグループ分けも実際の楽器や活動を試しながら、随時決定されていくため、学級会形式をとらない。

④音楽科に限定せず、教科の壁を超えて言葉や環境等、領域融合型の題材設定が可能である。例えば、オノマトペと音楽それぞれによる自然の描写、光と音、音楽など、自然科学的な視点や、食と音楽等との融合的な実践も可能となる。

⑤鑑賞と表現を区別せず、主体的かつ音楽的な対話・共創型学習を実現する。動きながら音楽を体で表現し、話し合いも打ち合わせ的に、立ったままで、対話をしては練習し、練習しては変更必要な点を話し合う。流動性のある実践形態が特徴となる。

⑥電子テクノロジーや多様な伝統楽器の組み合わせも可能となる。既成の楽曲や楽譜に縛られず、自在に楽器を組み合わせ、テクノロジーも含めて、あらゆる可能性を排除しないことが特色となる。研究チームでは、尺八やヴァイオリンの初心者でも実践に参加できるように、演奏方法やパートを工夫し、誰でも演奏出来て即合奏に参加できる方法を開発してきている。

⑦遠隔教育システムを活用しての実践も可能となる。地域を超えた共同体の形成に可能性を秘めている。

これらのミュージッキングの実践に内在する特色は、実践共同体の理論と親和性が高いことが見て取れる。壽谷他（2021）の研究では、実践の最中にいかに共同体が形成され、ひいては共生の学びにつながっているか理論的検討を加えつつ、示している。そこでは、実践事例の検証として、一つの設定された音楽の題材に、学習者の探求や協同が各学習場面で柔軟に組み合わさり、次第に集団形成がなされる過程を示している。本稿の着眼点であるミュージッキングと実践共同体の接点を、今後現場でも検証し、ミュージッキングにおける、人と人、人と音楽や社会との関わり合い、ひいてはミュージッキングを通した実践共同体の形成機序を明らかにしていく所存である。

特に不確実な我々の現代社会は、VUCAな社会と象徴的に示されるが、今までになく多様性や異なる他者と関わり合うことが求められる時代になっている。OECDの答申が示すように、国の利益や個人の存続ではなく、地球規模で社会のあり方を考える必要が提唱されて久しい。実践共同体的な音楽活動は、不確実性、即興性を含有しており、ミュージッキングはその修練の場となる可能性を有している。本稿では、特にミュージッキングにおける人と人の関わり合いについて、その特徴を踏まえつつ、ミュージッキングと実践共同体の接点を探索した。

引用・参考文献

Allsup, R. (2022). Remixing the classroom: Toward an open philosophy of music education. Indiana

University Press.
Dissanayake,E.(2000). *Arts and intimacy: How the arts began*. University of Washington Press.
Greene, M. (2011).
Small, C. (1998) *Musicking: The Meanings of Performing and Listening*, Middletown: Wesleyan University Press.
ウェンガー・エティエンヌ，マクダーモット・リチャード，スナイダー・ウィリアム（2002）『コミュニティオブプラクシス―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社
エレン・ディサナーヤカ（2018）「根・菜・花または幹：音楽の起源と適応的きのうについて」『絆の音楽性：つながりの基盤を求めて』音楽之友社
メルセデス・パヴリチェヴィック，ゲイリー・アンスデル（2018）「コミュニカティヴ・ミュジカリティとコラボレティヴ・ミュージッキングのはざまで：コミュニティ音楽療法からの展望」『絆の音楽性：つながりの基盤を求めて』音楽之友社
佐藤学（2021）『学びの共同体の創造：探求と協同へ』小学館
壽谷静香・ゴードンKリチャード・栗原清・竹澤栄祐・筒石賢昭・中山由美・芳賀均・安居總子・安久津太一(2021)「ミュージッキングの実践を通した共生の理念」『共生科学』第12巻
壽谷静香・芳賀均・安久津太一・芳賀真衣(2022)「へき地校におけるミュージッキングの実践－複数のへき地校をオンライン会議システムで結んだ集合学習－」『へき地教育研究』7